先天性會厭軟骨囊腫ノ一例

Tatsuo Tanemura: Über einen Fall von Epiglottiscyste.

金澤醫科大學耳鼻咽喉科教室 (主任 松田教授)

種 村 龍 夫

本論文ノ要旨ハ大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第22回集會ニ於テ發表セリ

目 次

第一章 緒 言	第四章 結 論
第二章 實驗症例	主要文獻
第三章 考 案	

第一章 緒 言

喉頭ニ發生スル囊腫ハ一般ニ比較的稀ニ見ルモノト稱セラル。即チ Jurasz ハ其統計的觀察ニ於テ喉頭ニ於ケル良性腫瘍192例中囊腫ハ14例ヲ見。Fauvel ハ300例中3例ヲ。M. Mackenzie ハ100例中2例ヲ得タルニ過ギズ。

然ルニ一方 Schwartz ハ喉頭囊腫トシテ138例ヲ。Moure ハ117例ヲ。Ulrich ハ126例ノ甚ダ多數ヲ認メタリ。

斯クノ如ク一方ニ於テハ甚ダ多數ノ囊腫ヲ見ルニ反シ。他方ニ於テハ稀ナリト稱スル原因ヲ考察スルニ。囊腫ナル診斷ノ根據ノ相違ニ因ルモノ、如シ。抑々纖維腫乃至單純ナル粘液「ポリープ」ニ於ケル病理組織學的檢索ニ際シ屢々囊腫様ノ空隙ヲ見ルモノナリ。斯ノ如キ場合。病理組織學的ニ Polyp mit Cyste, Fibrom mit Cyste, (Cystenfibrom, Cystenpolyp) 等ノ診斷ヲ以テシ。從ツテ喉頭囊腫トシテ統計的ニ甚ダ多數ヲ算スルニ至ルニアラザルカ。

然レ共眞性囊腫即チ内ニ内容物ヲ容レ。菲薄ナル囊ヲ形成セルモノハ臨牀上比較的稀ナルモノ、如ク。本邦文獻ニ於テモ喉頭囊腫中最モ多數見ラルル會厭囊腫ニ於テ。明治33年金杉氏ノ記載以來最近ニ至ル迄比較的精細ノ記載アルモノ漸ク24例ヲ數フルニ過ギズ。

就中内ニ濃厚鉛粥様物質ヲ滿セル Chiari. 或ハ Glas ノ Atheromcyste. 又ハ Atheromatige Cyste ニ類スルモノハ内外文獻上特ニ其記載尠シ。余ハ昭和9年5月所謂「アテローム」様囊腫トモ稱スベキ1例ヲ經驗シ。組織學的化學的ニ之レヲ精査スルヲ得。聊カ其成因ニ就キ考察セルヲ以テ茲ニ之レヲ記載シ文獻ニ追加セントス。

第二章 實驗症例

患 者 二〇忠〇。男。15歳。小學生(會社員族)。昭和9年5月8日初診。

家族歴 特別遺傳素質ノ認ムベキモノナシ。

既往歴 11歳ノ時「腸チフス」ニ罹リタル他著患ヲ經過セズ。

現病歴 本例ハ健康診斷中偶然ニ認メタルモノニシテ、自覺の症候ノ有無ヲ尋問セルニ、約3年前頃ヨリ感冒ニ罹リシ時ハ常ニ喀痰ノ咯出ニ困難ナリシト云フ。最近ニ至リ咽頭ニ甚ダ僅カノ異物感アリ。然レ共咽頭、喉頭部ノ疼痛、嚥下、呼吸乃至ハ睡眠障礙ヲ自覺セル事ナシト云フ。

現 症 體格榮養中等、胸腹部臟器ニ著變ナシ。聽器ニ於テ著變ナシ。鼻腔ヲ檢スルニ下甲介ハ兩側共中等度ニ肥厚セル他著變ナク、兩鼻腔共全ク清淨ナリ。口腔ニ於テ兩側口蓋扁桃腺ノ輕度ノ肥大ヲ認ム。

喉頭ヲ檢スルニ會厭軟骨舌面ニ於テ其正中線ヨリ僅ニ左方ニ偏シ、其遊離縁ニ近ク小指頭大、有莖、球狀ノ腫瘍ヲ認ム。其表面全ク平滑ニシテ蛇行狀ノ血管走行アリ。色ハ大部分ニ於テ淡紅色ナルモ、1部ハ帶黃色ヲ呈シ内容透見ス。柔軟ニシテ僅ニ波動ヲ觸ル。喉頭内ニ著變ナシ。患者ヲシテ發音セシムルニ其言語ハ多少不明瞭ニシテ、口腔内ニ何カ含ミツ、發音スル如キ狀態ナリ。

依テ會厭軟骨囊腫ノ診斷ノ下ニ、局所麻醉、ザイフェルト氏對壓器 Universalautoskop nach Seiffert ヲ用ヒ、腫瘍ヲ毀損セズシテ内容ヲ漏ス事ナク其莖部ヨリ完全ニ之ヲ摘出セリ。

摘出セル腫瘍ハ球形囊狀ニシテ單房性ナリ。大サ1.5—1.0—0.8 cmナリ。

其内容ハ帶黃白色一様平等ナル「クリーム」樣物體ニシテ、毛髮其他不潔ナル外觀ヲ有スル混雜物全クナシ。

其化學的檢索ニヨリ定性的ニ脂肪、「コレステリン」及ビ蛋白質ヲ認メ、脂肪酸ハ極メテ僅カ陽性ナリ。

病理組織學的ニ10%「フォルマリン液」固定、法ノ如ク「ツェロイディン」包埋後連續切片ヲ製シ染色檢鏡セリ。

囊腫壁ハ比較的厚クシテ檢鏡上之ヲ明ニ外、中、内ノ3層ニ大別スルヲ得。

外層、10數層ヨリナル厚キ重層扁平上皮ヲ以テ完全ニ被ハレ、其表層ニ於テ角化現象ヲ認メシムル部アリ。乳頭ハ腫瘍ノ莖部ニ近ヅクニ從ヒヤ、弱ク發育セルヲ認メタリ。

中層、粘膜下ハ鬆粗ナル結締織ニシテ其纖維ハ表層ニ竝行シテ走り、核ハ濃染シテ存シ、其間ニ血液ヲ滿セル小血管ヲ認メシム。中層ハ大部分ニ於テ淋巴濾胞ノ集簇ヨリ成リ其種子中心ハ著明ナリ。其他骨、軟骨、筋肉腺組織ハ之レヲ認メシメズ。

內層、10數層ヨリ成ル重層扁平上皮ヲ以テ完全ニ被ハレ所々ニ角化現象アリ。腫瘍天蓋部ハ其内面比較的滑澤ナルモ、其莖部ニ於テハ不規則トナリ瘤狀ヲ呈シ、腔中ニ突出スル部2個ヲ認メ、該部ニ於ケル中層ノ淋巴濾胞ノ發育ハ甚ダ大ナリ。又所々ニ上皮ノ甚ダ多層ニ發育セル部ヲ認ム。之レ上皮細胞ノ能動的發育ヲ示セルモノト思惟ス。

囊腫腔ハ連續切片ニヨリ檢索セシニ外層トノ交通ハ之レヲ認メズ。內腔ハ一般ニ空虛ニシテ其彎入部ニ於テ僅ニ「ヘマトキシリン」ニ淡染スル無構造ノ物質ヲ認メ、内ニ多少ノ剝落セル上皮細胞存スルモ淋巴細胞、白血球其他ヲ認メシメズ。

第三章 案

由來喉頭囊腫ハ學徒ノ感興ヲ唆ル事甚ダ大ナルモノアリ。而シテ其成因ニ關シ研鑽ヲ續ケラルハ、ヤ既ニ久シキモノアリタリ。Wenzel, Gruberニヨリ初メテ本症ノ病理組織學的檢索ニ導火セラルハ、ヤ。從來嘗ニ推論憶説ノ域ヲ脱セザリシモノ。其根據ヲ此處ニ掌握セントシ病理組織學的檢索ハ翁蔚トシテ勃興セリ。就中其所謂先天性モノニ對シテハ、或ハ胎生學的見地ヨリ、或ハ解剖學的見地ヨリ諸家ノ所說漸ク渾沌タルモノアリキ。

茲ニ於テ Louys ハ之等喉頭囊腫ヲ發生學的ニ總括シ、1. 潜溜囊腫。2. 腔腸性囊腫。3. 淋巴囊腫及ヒ血囊腫ニ分類セリ。次デ Glas ハ Chiari ノ臨牀ニ於テ經驗セル症例ヲ精査シ、之ヲ根據トシテ更ニ1項ヲ加ヘテ、1. 潜溜囊腫。2. 先天性囊腫。3. 外傷性囊腫。4. 淋巴囊腫及ヒ血囊腫ノ4類ニ分類セリ。

翻テ余ノ症例ノ如ク内容「クリーム」様ノモノ。乃至鉛粥様。或ハ Atherombrei トモ稱スベキ内容ヲ有スル囊腫ニ對スル諸家ノ所說ヲ案ズルニ、Chiari ハ囊腫内容 Atherombrei ナリシ2例ヲ Atheromcyste トシ、先天性ニ迷入セル胚芽ヨリ發生セルモノトシ、Glas ハ同様ノ内容ヲ有スル囊腫ヲ Atheromatige Cyste トシ、其成因ヲ先天性ノモノトセリ。入山氏ハ内容灰白色鉛粥狀ニシテ恰モ「アテローム」様ヲ呈スルモノ2例ヲ觀察シ、其成因ハ粘液腺ノ排泄障礙ニヨリ生ジタル1種ノ潜溜囊腫トシ、從來考ヘラレタル如ク、「アテローム」様囊腫ハ常ニ必ズシモ先天性ニ非ザルヲ證明セリ。而シテ氏ハ斯ノ如キ内容ヲ有スルモノヲ、臨牀上及ビ病理學上

ヨリ「アテローム様チステ」トシテ總括セン事ヲ提案セリ。

今余ノ症例ニ於テ其成因ヲ考察スルニ、其病歴、臨牀的並ニ病理組織學的所見ヨリシテ、Glas ノ外傷性囊腫、淋巴囊腫或ハ血囊腫ナラザル事ハ明白ニシテ、其内容ヨリ入山氏ノ總括的「アテローム様チステ」ニ屬スベキモノナルモ、之果シテ入山氏ノ例ノ如ク潜溜囊腫ニ一致スベキモノナリヤ。將亦 Glas ノ記載セル如キ先天性ノモノニ屬スベキヤ。研鑽ヲ要スベキモノナリ。入山氏ハ第1例トシテ48歳ノ男子ノ會厭軟骨舌面ニ於テ、左舌會厭窩ニ近ク約小指頭大腎臟形ノ「アテローム」様囊腫ヲ認メ、第2例ノ54歳ノ男子ニ於テハ會厭軟骨舌面ノ兩側舌會厭窩ニ接シ、左右相對的ニ2個ノ小豆ヨリ稍大ナル「アテローム」様囊腫ヲ見、右側ニ於テハ更ニ其外方ニ1個ノ小ナル圓形灰白色ノ單純ナル潜溜囊腫ヲ認メタリ。以上2例3個ノ「アテローム様チステ」ノ組織學的所見ハ殆ンド同様ニシテ、囊腫壁ハ一般ニ肥厚シ、内外兩壁ハ共ニ重層扁平上皮ヨリ成レ共、其内壁上皮ハ頽廢消失スルモノ多ク、僅ニ其痕跡ヲ留ムルノミナリ。間質ハ結締織層ニシテ可成リ肥厚シ核ニ富ミテ濃染シ、多數ノ圓形細胞浸潤アリ。結締織中ニハ小血管多ク、尙ホ所々ニ粘液腺散在ス。淋巴濾胞ノ明ナルモノナク、囊腫壁ハ軟骨及ビ周圍トノ癒着等ナシ。

而シテ氏ハ之等囊腫ノ成立機轉ヲ考察シ、其外觀、形狀、位置及ビ内容ノ鉛粥狀ニシテ「アテローム」内容ニ似タル點ハ Chiari ノ先天性成因ニヨル所謂「アテロームチステ」ヲ想像セシムルモ、其周圍特ニ軟骨トハ何等關係ナク、囊腫壁ハ肥厚シ且ツ圓形細胞ノ浸潤強ク、又内壁ノ

重層扁平上皮ハ所々頽廢シテ僅カニ痕跡ヲ留メ、且ツ囊腫壁ニ多數ノ擴張セル粘液腺ヲ認ムル等ハ、Chiariノ所謂「アテロームチステ」トハ其成因ヲ異ニセルモノトセリ。

而シテ擴張セル粘液腺ヲ多數ニ見ル點、及ビ第2例ニ於テハ單純ナル潑溜囊腫モ附近ニ存在スル事等ハ、寧ろ粘液腺ノ排泄障礙ニヨリ生ジタル1種ノ潑溜囊腫ナリト想像セリ。内容モ初メハ單純ナル漿液性又ハ粘液性液ナリシナランモ、之ガ反覆セル慢性炎症性刺激ノタメニ變化ヲ蒙リ、遂ニ灰白色鉛粥狀トナルニ至レルモノトセリ。

Glasノ記載セル例ヲ見ルニ22歳ノ婦人ニ於テ其舌會厭窩ニ蠶豆大ノ囊腫ヲ認メ、組織學的ニ該囊腫ハ多房性ニシテ、其内壁ハ主トシテ重層扁平上皮ヲ以テ被ハレ、其大部分ハ甚ダ厚クシテ細胞列10乃至15ヲ算ス。

上皮下ノ組織ニ於テ圓形細胞ノ集積甚シク多數ノ淋巴濾胞ヲ認ム。腺ハ何處ニモ認メ得ズ。尙ホ興味アル點ハ不規則ナル形ヲ呈セル囊腫壁ノ各隅ニ於ケル上皮ノ狀態ニシテ、所ニヨリテハ或ハ扁平上皮、或ハ移行上皮、乃至ハ柱狀上皮、毳毛上皮ノ認メラル、點ナリ。本例ヲGlasハ先天性ノモノトセリ。

翻テ余ノ例ニ於テハ、其位置會厭舌面ニ於テ遊離縁ニ近ク存スル點ハ兩氏ノ症例ト全ク異ルモ、内層ハ10數層ヨリナル重層扁平上皮ヨリ完全ニ被ハレタル點、中層ニ多數ノ淋巴濾胞集簇ノ存スル點、腺組織ノ認メラレザル點等ハ、Glasノ症例ニ類似セルモノナリ。然レ共余ノ例ニ於テハ單房性ニシテ、且ツ毳毛上皮、柱狀上皮及ビ移行上皮ハ之ヲ認メザリキ。

抑々胎生の囊腫ノ根據トスル點ハ諸家ニヨリ種

々論ゼラル、處ナルモ、SalomonハLouysニ倣ヒ喉頭囊腫ヲ先天性ノモノトシテ識別スル標準ヲ、其位置、形狀、内壁上皮ノ性状及ビ囊腫壁ノ異常成分ノ4項ニ置キタリ。

固ヨリ之等ヲ以テ確實ニ識別シ得ラレザル場合多キモ、余ハ便宜上之ニ從ヒテ余ノ例ヲ考察セントス。

囊腫ノ位置並ニ其形狀ヨリ種々論ゼラル、モ、之ヲ以テ確實ニ識別シ得ル根據頗ル尠シ。

囊腫内壁上皮ノ性状如何ハ甚ダ重要且ツ興味深キモノナリ。從來記載サレタル上皮トシテハ重層扁平上皮、扁平上皮、移行上皮、骰子様上皮、柱狀上皮及ビ毳毛上皮ナリ。然レ共是等ノ上皮ノ性状ハ順次移行シ得ルモノニシテ、之ヲ以テ確實ニ囊腫ノ發生原因ヲ究ムル事容易ナラズ。

例ヘバ余ノ例ニ於テ囊腫内壁ニ重層扁平上皮ヲ認メタリト雖モ、之ヲ直ニ腮溝ノ外層ヨリ發生セルモノト斷定スルハ甚ダ早計ニシテ、扁平上皮ハ柱狀上皮ヨリモ變性シ得ルモノタルヲ知ラザルベカラズ。即チ生理的ノ例トシテ食道ニ於ケル重層扁平上皮ノ發生地ハ毳毛柱狀上皮ヲ以テ被ハレタル頭腸腔(Kopfdarmhöhle)ナリ。

亦病的ニモ慢性炎症乃至ハ細菌ノ作用ニヨリ柱狀上皮ヨリ扁平上皮ニ變性シ得ルモノナリ(Schnitzler)。又柱狀上皮ハ其內腔液ノ潑溜ニヨリ壓迫萎縮ニヨリ扁平上皮ニ變形シ得ルモノナリ。從ツテ之ヲ極言スレバ、定型的ノ表皮性臟器、例ヘバ皮脂腺、爪等ヲ認ムルニ非ズバ腮溝ノ外層ヨリ發生シタルモノト確定スルヲ得ズ。

囊腫壁中ニハ往々其發生地ヲ知ルベキ異狀組織ヲ認ムルモノナリ。即チ腮溝ヨリ發生セル囊腫ノ壁中ニハ軟骨、骨、筋肉、葡萄狀腺、淋巴濾胞等ヲ發見スル事屢々ナリト云フ。而シテ一般

ニ是等ノ異常組織ハ其囊腫ノ腮溝ヨリ由來セルヲ決定スル最モ確實ナル標識ト稱セラル。

Salomonハ異常組織就中軟骨、葡萄狀腺ノ證明ヲ除キテハ其腮溝性ナルヲ確定スル何物モナシト迄極言セリ。

余ノ例ニ於テハ其壁中多數ノ淋巴濾胞ノ集簇ヲ認めラレタリ。Gussenbauer ハ腮溝ヨリ發生

セル囊腫ノ壁ニ於テ淋巴濾胞。又淋巴結節ノ集簇セル事ヲ高唱セリ。然レ共 Oppikofer ハ之レニ對シ尙ホ多少ノ疑問ヲ挾ミタリ。然レ共余ハ余ノ症例ニ於テ、暫ク Gussenbauer 其他ノ所說ニ從ヒ腮溝ノ殘胎ヨリ發生セル先天性ノモノト推察セントス。

第四章 結 論

1. 本例ハ15歳ノ少年ノ會厭軟骨舌面ニ於テ、其正中線ヨリ僅ニ左方ニ偏シ、遊離縁ニ近ク發生セル小指頭大、有莖、球狀ノ囊腫ナリ。

2. 囊腫内容ハ帶黃白色一様平等ナル「クリーム」様物體ニシテ、所謂「アテローム」様囊腫ナリ。

3. 内容ノ化學的檢索ニヨリ定性的ニ脂肪、「コレステリン」及ビ蛋白質ヲ認め、脂肪酸ハ極メテ僅カ陽性ナリ。

4. 組織學的ニ囊腫壁ハ内、中、外ノ3層ニ大別スル事ヲ得。内、外層ハ共ニ厚キ重層扁平上皮ニシテ、其表層ニ於テ角化現象ヲ認めシムル部アリ。中層ニ於テ多數ノ著明ナル淋巴濾胞ノ集簇ヲ認めタルモ、其他骨、軟骨、腺等ヲ認めザリキ。

5. 本例ハ腮溝ノ殘胎ヨリ發生セル、先天性ノモノト推察スルヲ最モ妥當ナリト信ズ。

擧筆ニ當リ御指導御校閲ヲ賜ハリシ松田教授ニ深謝シ、種
種御示教ヲ賜ハリタル病理學教室中村教授ニ厚ク感謝ス。

文 献

1) Chiari: Chirurgie des Kehlkopfes u. der Luftwege. Neue deutsche Chirurgie Bd. 19, 1916.
2) Glas: Über Larynxzysten. Arch. f. Laryng. Bd. 19, 1907. 3) Gussenbauer: Ein Beitrag zur Kenntnis der branchiogenen Geschwülste. Beitr. z. Chirurgie. Festschrift. f. Billroth. 1892.
4) 入山義夫、會厭ノ「アテローム様チステ」ニ就テ。大日耳鼻、31卷、大正14年。 5) Jurasz: Die gutartige Neubildungen des Kehlkopfes. Heymanns Handbuch Bd. 1, 1898. 6) Jurasz:

Epiglottiscysten. Deutsch. med. Wochenschr. 1884. 7) Louys: Des kystes intralarynés branchiogènes. Rev. d. Chir. 1899. 8) Moure: Etudes sur les kystes du larynx. Paris. 1881. 9) Oppikofer: Zur Frage der Epiglottiscysten. Arch. f. Laryng. Bd. 21, 1909. 10) Salomon: Über Larynxzysten. Zeitschr. f. Ohrenheilk. Bd. 62, 1911. 11) Thost: Cysten des Kehlkopfes. Denkers Handbuch Bd. 5, 1929. 12) Ulrich: Über Kehlkopfzysten. Dissertatin. 1887.

(原稿到着ニ昭和9. 10. 26)

種 村 論 文 附 圖

先 天 性 會 厭 軟 骨 囊 腫 ノ 一 例

Fig. 1.

Fig. 2.

第1圖 剔出セル腫瘍 (自然大)

第2圖 腫瘍壁組織學的所見

(膨大57倍)

a) 外層。(重層扁平上皮)	b) 粘膜下に於ケル結締組織
c) 血液ヲ滿セル小血管	d) 淋巴濾胞
e) 内層(重層扁平上皮)	